

日本語は他国語と比して難解な言語だと言われています。自身でも書いたり話したりしている時に確信が得られない場合もあります。日本語が難しいとされる理由は、文法の複雑さや語彙の豊富さ、オノマトペの多さなど多岐にわたりますが、今回は的を絞って漢字の読み方、特に「連濁」について考えたいと思います。

「連濁」とは、「カ」「サ」「タ」「ハ」行で始まる語頭清音が、語の複合によって濁音化

する現象のことで、「入り口（グチ）」や「奥深（ブカ）い」などです。どちらも濁ることが多いようですが、人によって濁ったり濁らなかったりする言葉が存在するので厄介です。「声掛け」は「コエカケ」なのに、「お声掛け」は「オコエガケ」になったりします。NHK放送文化研究所のサイトを見ると連濁について非常に興味深い研究が数多くあります。

例えば、私達が普段目にする「依存」や



医界サロン

日本語の揺れ——連濁について

広報委員 弓崎 恭俊

「依存症」について次のように述べられています。

現在は、「①イゾン ②イソン」で、「イゾン」を優先させています。「依存症」についても同様に「イゾンショウ」を優先させるようになりました。

平成26（2014）年2月の第1379回放送用語委員会でも話し合った結果、放送で優先させる読みを変更しました。「依存症」という言葉は、アルコール依存症や薬物依存症、さらには近年注目されるインターネット依存症やゲーム依存症など、社会問題と直結する場面で用いられます。メディアや医療現場で繰り返し使用される中で、発音のしやすさや一般人にとっての分かりやすさが重視され、「イゾンショウ」という形が定着していったようです。

では、「依存症」の正しい読み方はどちら

なのでしょう。辞書的には両方が許容されているため、一概にどちらが正しいとは言えません。しかし実際の社会においては「イゾンショウ」がほぼ標準であると考えてよいと思われます。とはいえ、「イソンショウ」と読む人を誤りと指摘する必要はなく、むしろ日本語の豊かさの表れとして受け止めるべきでしょう。

日本語は歴史的に、多様な読み方や用法を受け入れてきた言語のようです。「存」を「ソン」と読むか「ゾン」と読むかの問題は、まさにその柔軟性を示す好例です。言葉は人々の使い方によって変化するものであり、規範だけで縛ることはできません。その意味で、「依存症」の読み方の揺れは日本語の本質そのものを映し出していると言えるでしょう。